

2012 年度司書課程主催行事等報告

本誌の冒頭で特集記事を掲載しているが、その二つが、本年度に司書課程が主催した大きな行事であった。まずは、2012年11月25日（日）の13:30～16:30に、池袋キャンパス14号館6階D601教室にて、公開シンポジウム「逸脱する図書館」を実施した。これは、図書館に従来与えられがちであった、整然とした静的空間のイメージを問い直すべく、近年、身体と学びについて、また、創造に関わって積極的に発言されている2名の講師をパネラーにお招きし、図書館関係者との交流の場をもつことを目指して企画した。ホリスティックな知を育む学校・図書館を考える会の代表の足立正治氏に、初期に企画をお手伝いいただいた。そうしてお迎えした講師は豪華で、港千尋先生（多摩美術大学教授）と河野哲也先生（本学文学部教授）である。それぞれに、「読書と創造のあいだ」、「思索と対話をこえて」と題してお話をいただいた。コーディネータは司書課程主任が務めた。それほど積極的に広報しなかったため参加者は多くはなかったが（積極的に広報していたら、部屋も運営もパンクしていた）、それゆえ、打ち解けた雰囲気の中でパネラーと参加者との対話を実現したように思う。その対話の記録も、全面的にテープ起こしをして、今回、掲載している。

12月2日（日）13:00～16:00には、池袋キャンパス本館（1号館/モリス館）2階1202教室にて、公開シンポジウム「ドイツの図書館思想」を開催した。学内の制度の変更から、今年になって、河井弘志先生（ご存知のとおり、立教大学に長年、教授として司書課程主任としてお勤めになられた）が名誉教授号を受けられた。それをお祝いしたかったことと、河井先生の「マルティン・シュレッティンガー：啓蒙思想と図書館学」の出版を記念したいということが、企画の発端であった。その思いに賛同してくださった方は多く、結局、ドイツの図書館思想に関わる研究について河井先生に基調講演を行っていただくだけでなく、その基調講演に答える形で、現代のドイツの図書館に詳しい、ゲーテ・インスティトゥート図書館長のバーバラ・リヒター＝ヌゴガング氏から「ドイツの図書館の今」と題するお話をいただ



12月2日 立教図書館人クラブ懇親会

き、同図書館司書の吉次基宣氏に通訳をお務めいただくことができた。さらに、ドイツの社会思想史が専門の小林純経済学部教授から、「図書館利用者の感想」と題するお話をいただくことができた。ゲーテ・インスティトゥートは、共催者になってくださった。コーディネータは司書課程の永田治樹教授が務めた。シンポジウムの終了後には、16:00～17:00に、秋に開館したばかりの、立教大学池袋図書館の見学会を実施、さらに17:00から、立教大学図書館人クラブ主催の懇親会が行われた。卒業生への連絡のためには、立教大学図書館人クラブの方たちが会員名簿の整理、案内状の送付等を熱心にしておられ、卒業後何年経っても河井先生のもとに集まれる多くの卒業生のようすに、在校生や現職の司書課程教員は勇気をもたらしたように思う。なお、本誌には、当日のテーブル起こしではなく、後日、3人の講師の方から、お話を改めて書きおろして寄稿していただいた。

このほか、今年、5月19日（土）に、図書館実習事前指導IIを行い、豊島区立中央図書館から、秋山直樹氏、江口茂香氏、佐々木強氏を講師としてお招きした。公立図書館の実態について、また実習生が事前に心しておくべきことについてお話しいただき、学生には改めて気を引き締めて、実習に臨んでもらえたと思う。このときのご講演の記録は、本誌に掲載している。さらに、このときのご縁から、同図書館の新井清士氏と恩田早紀子氏をご紹介いただき、12月15日（土）の14時～16時に、「としま哲学カフェ」を開催することができた。この哲学カフェは、豊島区立中央図書館と司書課程が共催となり、豊島区在住または在学の中学生・高校生がジャンプ長崎という豊島区の中高校生センターに集まって行なわれた。司書課程主任から、本学文学部教授の河野哲也先生をファシリテーターとしてご紹介した。このあと、豊島区での経験のうえに、12月22日（土）の13:30～15:30に、ふたたび河野先生にファシリテーターをお願いして、いわき市立いわき総合図書館と司書課程の共催で、大人の哲学カフェ「震災後の私たちの生活、社会を考える」を実施した。この企画の実現にあたっては、同図書館の新妻秀次館長に非常にご尽力いただいた。当日、東京からの特急電車が途中で止まってしまい、開始時刻を遅らせてもらうというトラブルに見舞われ、その点でも新妻館長をはじめみなさんに大変なご迷惑をおかけしてしまった。この二つの哲学カフェには、立教大学の学生たちがボランティアとして運営に参加した。参加者のうちの二人に（二人とも司書課程の履修生ではないのだが）、企画について記した文章を寄せてもらい、本誌に掲載することができた。来年度以降も、両図書館で哲学カフェを実施したいと思っている。

また、河野教授と事務室の深野毅課長らと司書課程主任は、11月1日から2日にかけて、陸前高田市を、本学の復興支援本部の支援を得て、訪問することができた。12月1日に仮設の市立図書館が開館したが、その準備に追われているところに伺うということになり、大変に恐縮したが、多くの方たちにお目にかかることができた。とくに、陸前高田市教育委員会の金賢治次長および同市図書館の長谷川敬子氏とは、継続した協力・連携に向けて、前向きなお話をすることができた。哲学カフェの実施といったところにはまだ至っていないが、本学卒業生の木原祐輔氏が会長を務めるキハラ株式会社から大変なご協力をいただき、図書館整理のための用品を本学から寄贈することができ、また書架の寄贈の話が進んでいる。これらのボランティア事業は、深野課長が実務作業を担当している。

今年度はさらに、埼玉県立浦和図書館と本学経営学部・大学院ビジネスデザイン研究科と司書課程が連携し、同研究科の必修科目である「ビジネスシミュレーション」にて、浦和図書館のビジネス支援サービス充実に向けての提案を検討した。11月23日（金・祝）16:00～18:00には、池袋キャンパス8号館3階8304教室にて、同クラスの受講生に対し、永田教授から「海外の図書館におけるビジネス支援について」の短い講義を行った。そして、浦

和図書館の長谷川優子氏から「埼玉県立浦和図書館の現状と課題」をご講義いただいた。このあと、約3ヶ月をかけて院生が提案を検討、2013年3月9日（土）15:00～17:00に11号館2階A203教室で開催されたビジネスクリエーター研究学会にて、院生の4チームから、検討結果の報告が行われた（1チームあたり報告20分+質疑10分）。浦和図書館の小西美穂氏と長谷川氏が質疑応答に立たれ、大変刺激的な報告会となった。この連携事業については、浦和図書館の司書の方たち、乙骨敏夫副館長、大久保泰氏、さらに青淵正幸准教授をはじめとするビジネスデザイン研究科の先生方に大変にお世話になった。この事業については、浦和図書館の長谷川氏から本誌に報告を寄せていただいた。

最後になってしまったが、11月19日（月）5限の、図書館情報資源概論の授業時に、ゲスト講師として、長年、国立国会図書館に勤めておられた折田洋晴先生にお出まじいただき、「洋書の選書業務から蔵書管理業務まで」をお話いただいた。この講義には、関心をもった、本学図書館の阿久津美都子部長をはじめとする5名の職員の方たちが参加された。うち、新座からわざわざいらしてくださった鈴木加奈子氏に、本誌に報告をお寄せいただいた。

以上、司書課程の運営のあらゆる面で、兼任講師の先生方、学内外のみなさまが惜しみなく力を貸してくださった。ここに記して、感謝申しあげる。

（文責・中村百合子）

図書館で哲学対話をする事

渡邊 文（文学部教育学科教育学専攻4年）

2012年12月15日、小雨が降る中、豊島区中高生センター ジャンプ長崎で、中高生向けに「としま哲学カフェ」が開催され、私は進行のお手伝い役としてこのイベントに参加した。この時に感じたこと、考えたことをここに述べる。

今回の「としま哲学カフェ」に集まった人たちは、中高生が約10名とその他に私と同様にお手伝いに来ていた大学生、見学に来ていた大人の方が数名いたため、全体で15名程であった。初めはその15人を二つのグループに分けて「相互問答法」が行われた。「相互問答法」は、グループの中で、一人の人に対して他の人が順番に質問していくというものである。また、他の人は質問するだけで、自分の考えを言っはならない。例えば、この時に挙げられたテーマとして、「人はどんな時に幸せを感じるか」という問いがあり、それに対してグループの中の一人が「私は家族と一緒にいるときに幸せを感じます」と答え、グループの中の他の人が「なぜそう思うのか」などの質問をしていくのである。このような質問を繰り返し、それぞれの思考を深めていくというものである。

この相互問答法を通して感じたことは、普段学校であまり活発に発言しないだろうと予想できるような高校生も自然と自分の考えを積極的に話すことができているということである。私の経験からの予想でしかないが、今回集まってきた高校生の特徴として、本が好きで、学校のクラスでは大人しいのだろうと想像できるような性格の子たちが多かったように思う。「本を読むことで現実逃避をする」というような話を何人かの子が話していた。このように、普段の生活では物事に対して比較的受動的な子たちが哲学カフェに集まることで積極的に